

---

# 精霊と異世界人

アキライ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

精霊と異世界人

### 【NZコード】

N4952Y

### 【作者名】

アキライ

### 【あらすじ】

「その服装。あんたスローネ学園の生徒かい？」

約半年まで、俺は普通の学生だった

「・・・アキラ？」

何でココに転移したのか

「くつ、この化け物がー！」

何でこんなこと言われるのか

「一体何者よ・・・？」

それでも俺は

「バカな精霊とただの異世界人ですが？」

地球から異世界に転移させられた少年と、異世界で出会った精霊の物語

少年は、慣れない世界でどう歩むのか

初投稿です。未熟な部分を多いと思いますが、生温かい目で見守  
つていただくと幸いです。

一応受験生なので、投稿スピードについては不満があると思います  
がご了承ください。

## プロローグ（前書き）

「指摘があったので少し改めました

空行はどのよつな具合がよいのか分からないので、とりあえず改行を増やしてみました。

「これおかしくね？」と思つた方は、遠慮なく「指摘していく下さい

## プロローグ

「その服装。あんたスローネ学園の生徒かい?」

「ええ、まあ」

馬車を運転していた男の人に急に質問され、曖昧に返事してしまった。名はマーガスさん。

「へえ、そうなるとあんたも精霊使いというわけか。・・・まさか隣で寝ている美少女はあなたの精霊かい?くう~、羨ましいね~」

「そうですけど、おじさんが思っているほど羨ましいことじやないですよ。少なくとも俺はそう思っています」

何言っているこの色男。と言っているマーカスさんを無視し、俺の肩に頭を置いて寝ている少女へと目を移す。銀と言つよりも白銀に近い髪が、窓から入ってきた風で俺の目の前でなびく。彼女の腰まであるその髪は、バカにするように俺の視界を遮る。その髪を二つの意味でうつとうといと思い、手で払う。

一つ目は純粹に前が見えない。一度よく振り向いたマーガスさんの顔がニヤついていたのは、気のせいだと思いたい。

二つ目は・・・無駄にいい匂いがする。コロンのような甘い香りじゃなく、清潔なソープの香り。俺は慣れているからこれくらいじゃあ何ともないが、普通の男ならコレ+上目遣いで病院行きだな。原因?出血多量だろ。

「ルナ・・・、いい加減に起きろ・・・」

マーカスさんのニヤけた顔を思い出して、さすがに恥ずかしく思った俺は、眠り姫・・・もとい「ルナ・プラネット」を起こす。

少し経つと、その整った顔から、パチリとした目がゆっくりと開く。

「・・・」「・・・

「お~い、ルナさん?」

「・・・

「・・・お~い?」

返事がない。ただの人形のようだ。

「・・・アキラ?」

「お?返事した」

アキラとは俺の名前。「アキラ・シグレ」。漢字にすると「時雨暁」。

なんとなく分かるように、俺は日本人だ。しかしここは日本ではない。ましてや地球でもない。名前は知らんが、ここは異世界らしい。俺はいわゆる転移してきたのだ。転生ではないので、あっちの世界ではちょっとした神隠しだろう。しかし帰ることができないで、こうして現実を受け止めて今に至る。何故こうなったかは、後々語ろう。

「・・・何かあったの?」

「ああ、俺が社会的に死ぬか死ないかの瀬戸際だ」

「なら大丈夫ね」

「その根拠を聞こつか?」

「私は関係ないもの」

「せめてそこは「アキラは死ない」にしてつーつかお前が犯人だろ!」

「犯人はこの中にいるわ」

「どこの少年探偵!?確かにいるね!お前だよ!お前しかいないよ!

「これは集団犯行ね」

「いつの間にそんな大事件に！？謎が謎を呼ぶの！？」

「何を言っているの？真実はいつも一つよ」

「犯人も一人ね！お前の場合見た目も頭脳も子供だよ！」「ひどい」

「俺のほうがひどい目に会つているよ！」

「じゃあ誰が犯人？」

「よし、ここで落ち着いて考えてみよう」

「アキラ？」

「俺は被害者」

「馬車のおじさん？」

「マークさんは傍観者」

「わた・・・、それじゃあ一体誰かしら？」

「言いかけたよね！？私つて言いかけたよね！？認めたくないのかな！？認めたくない年頃なのかな！？」

「僕はキラなんかじゃない、信じてくれよ」

「関係ないよね！？キラさん関係ないよね！？急に出てきてキラさんもビックリだよ！？とりあえず謝りなさいー『デスノート』に書かれる前に謝りなさい！」

「アークエンジェルに？」

「そっちのキラなの！？フリー・ダムなの！？」

「ストフリよ」

「どっちでもいいわー！！」

なんでこいつは地球の知識を知っているのだ・・・あ、前に話したことがあるからか。

気づいたら馬車は止まっていた。何事かと馬車のマークさんは見れば、腹を抱えて爆笑していた。

・・・この野郎、他人事だと思って・・・。

マーガスさんの笑いが収まると、馬車は再び動き始めた。

「アキラ」

「なんだよ」

「鳥がいる」

「そうだな」

「可愛い」

「そうだな」

「今夜は焼き鳥がいいわ」

「食欲失せるわ！」

するとまた馬車が止まった。

「マーガスさん、ふざけてないで先を急ぎ・・・」

「おい、そここの馬車！命が欲しけりや止まれ！」

前を見ると、いかにも山賊の格好をした4人組みがいた。おいおい、これ以上俺の平穏を壊さないでくれ・・・

俺たち三人は大人しく降りた。ルナが降りたとき盜賊の目の色が変わった。

自爆したな・・・

「兄貴！あいつ上玉ですぜ！」

「ああ、しかもかなりの特大サイズだ！」

あいつらのテンションに反比例して、こっちのテンションは下がりまくりだ。マーガスさんに至っては、この世の終わりのような顔になつてている。まあ、一般人はそうなるよな。

すると何か思い出したように、マーガスさんは希望の眼差しで俺を見つめてきた。

「なあ、あんた精霊使いだよな？なら、あいつらやつつけてくれよ

！」

少し興奮しているのか、小声にも関わらず、少し大きい。確かにそう考える。けどな

「残念ながら俺は転入生として学園に入る。よつて、俺はよく分からん」

間違つてない。だつて俺は転移者。この世界に来て一年どころか、半年もたつてない。

よつて、何故精霊が存在するの?今この世界の状況は?そんなこと聞かれても知らん。

ましてや俺のパートナーがアレでは、まともに知ることなんてできん。

「そ、そんなあ~」

マーガスさんは崩れ落ちた。そんな中、盗賊たちは新たな発見があつたらしい。

「兄貴!こいつ精霊ですぜ!しかもまだ未契約の!」

あーあー、ばれちゃつた。

この世界には魔力がある。しかし人間には存在しない。どうやらこの世界で魔力を持つのは精霊のみらしい。

しかし精霊は魔力があるだけで、使うことはできない・・・と思う。でも人間には魔力を使うことができる「器」がある。それを互いに理解し合つた人間と精霊は、契約を交わし始めたのだろう。話がずれたが、ようは魔力があれば精霊。なければ人間。ということで。魔力の感知は、一回でも精霊とかかわつたら触る程度で分かるだろう。

「何!?人型の精霊だと!?.?.?.ほつ、未契約か。坊主!残念だつたな。こいつは俺が契約させてもらつぞ!」

「あ~、やめといたほうがいいぞ~」

あのおっさんが言つてゐる「契約」とは、精靈の力を使うための儀式である。

まあ儀式と言つても、お互いが承認したらできる簡単なものだけだな。契約の完了した場合、どこかしらに証が付く。ちなみにルナは契約してないから証はついていない。

・・・そういうや人型の精靈は珍しいのか？

他の精靈は見たことないからな。マークスさんが羨ましがる理由が少し分かつた気がする。

「ふん、下手な脅しを。おいお前、俺と契約しろ」「ああ～、俺は忠告したからな。隣でマーガスさんが何か騒いでいるけど、なんとなく分かるので無視。バカみたいに純粋なルナは、契約のために魔力を練り上げている。俺が言えればやめると思うけど、あのおっさんは身をもつて知つたほうがいいだろ？」

「Contract > 契約 <」

おっさんが光始めた。

「・・・おお・・・！これは凄い！魔力があふれてくる！」「す、すげー・・・。兄貴！凄いですぜ！」  
「まさかこれほどとは・・・！」

「初めてみたぜ！」

口々に素直な感想を述べている。まあルナの魔力は多いなんてもんじやないからな。

「ふふっ、ははは！ふははは・・・ぐつ・・・ぐはつ！」「・・・やはりか。突然おっさんが血吐き始めた。

「あ、兄貴！！」

他の三人の盗賊はおっさんに寄りそつた。マーガスさんも困惑している。それに比べて、ルナはいつも通り無反応だ。

「くっ、このアマー何しやがった！？」

どうやらルナがやつたと勘違いしたらしい。あながち間違いではないのだが。

「私は契約しただけ」

そういうと、背を向けて歩いてきた。

「嘘つくな！」

まだ寝たりないのか、ルナは途中途中あぐびしていた。

「嘘じやないよ。そのおっさんガルナの魔力を受け止められなかつただけだ」

人間の器にも限界がある。

もし受け止められなかつたら、魔力は溢れ、体を巡る。人間の体は、魔力を受け止めることはできるが、所詮それは器だけ。よつて溢れた魔力は体を破壊する。

ちなみに、肉体強化魔法は、自殺と同義語だ。

「さて、そろそろ行きましょう。マーガスさん、出してください」

ルナが一人戻ってきたところで、俺はおじさんに声をかけた。

しかしマーガスさんは一人騒いでいる。はて？何故だ？

「このクソガキ！！」

振り向くと二人が武器片手に俺へと向かってきた。もう一人は弓による遠距離攻撃。

マーカスさんが騒いでいたのはコレか。

隣を向くと、俺の頭より一つ小さいルナが見上げていた。

「アキラ、どうするの？」

「逃げるのが一番だけど、状況が状況だしな・・・。しかたがねえーな。行くぞ、ルナ」

ルナはコクリと頷いた。と同時に、光に包まれた。

?

## プロローグ（後書き）

下手な作品でスミマセン  
プロローグ長くね？といつ疑問については笑って流してください  
誤字・脱字があつたら指摘お願いします

## 学園と隕石注意報（前書き）

同じく改めました

何かあつたらアドバイスお願いします

森を抜け、やつと俺たちは学園のある街へと移動してきた。

「おじさん、ここでいいです」

街に着いたし、後は歩いていっても遅くならないだろう。

「いやいや、さつきのお礼もあるし、学園まで送つてやるよ。もちろん料金もいらないかな。」

「お金はさすがに払いますよ。それにお礼と言つても、あれは俺たちが巻き込んだだけですし……」

「いいから、いいから。命の代金だと思えば軽いものよ」

ほんとにたいしたことないのに。

俺はまた眠り始めたルナを見ながら、さつきのことを思つ出した。

・・・

「おい・・・何でなんだよ・・・?」

山賊たちはうろたえていた。確かにその気持ちは分からんでもないな。

「なんで契約なしで武器化できる!...」

(・・・やつぱりそうか)

俺は内心苦笑した。

右手を見ると、片刃の細長い剣・・・もとい太刀が、白銀の輝きを放つている。

魔力があると言つても、魔法が使えるわけではない。できるのは「魔力で武器を創る」とこと。しかし創るとこことは魔力が必要。そして魔力は精靈と契約することで手に入る。つまり契約しなければ武器化はできない。

・・・のはずなのだが。

「どうやら世界の理は、あつけなく崩されたらしく。

「あの～・・・、つかぬことをお聞きしますが、普通は契約なしに武器化できないのでしょうか？」

「あ、当たり前だろうが！」

なるべく丁寧に聞いたのに、乱暴に返していくとせ・・・。ビリサ詳しい事は学園で聞けばいいしな。

「はあ・・・、じゃあ受付に間に合わせたいので、来るならいつとかえてください。」

思わずため息が出てしまったのは、今後のことを考えたからであつて、別に「あの盗賊ベタだな」とか思つていませんからね？

「くっ、この化け物がー！」

それを掛け声として、一斉に掛かつてきた。

（化け物か・・・）

そう呼ばれるのも仕方がないように感じてきた。

バカ正直に突つ込んできた盗賊Aを避け、足を掛けて転ばした。頭ではのんびりと考えているが、体はしつかりと反応している。

次に盗賊Bが大きく縦に振つてきた斧を、片手で太刀を持ち、そのまま受け止める。

盗賊に斧とは・・・ベタだな

それを押し返し、崩れたところに峰打ちを決める。盗賊Bは、大きく目を見開いたまま倒れていく。

100まで、わずか三秒。

そのまま残りの盗賊Cを見ると、彼は怯えながら『』を乱射してきた。それを時には避け、時には払つて無傷で済ました。

防ぎ終わったときには、俺の周りは『だらけだつた。

「よく一人でこんなに放てるな」

感心してしまつた。『』の腕だけなら城の兵士としてやつてこけるだ  
らい。

「ば、ばけものーー」

盗賊Cは、まるで悪夢を見たよつた顔で逃げてつた。

「仲間を見捨てるのかい？」

問いかけても答えない。まあ当然だよな。俺は足元で寝ている盗賊  
Aに促した。

盗賊Aは盗賊Bを連れて逃げていつた。

・

「よし着いたぞ。短い間だつたが、色々とお世話様  
どいつもから回想している間に着いたらしい。

「いえ、じちらじや。わざわざすみません」

俺はルナを起こしながら挨拶をした。

「おいおい、何であんたがお礼する。あんたは俺の命の恩人だよ。  
こつちがお礼言つ側だ」

ルナは起きない。

「そんな大げさな。あとさつきの戦いは他言無用でお願いします」

俺はルナを起こしながら返答した。

「未契約での武器化の事かい？分かつたよ、それであんたの役に立  
てるなら大歓迎だ。でも何でだい？」

・・・ルナは起きない。

「契約なしの武器化は珍しいので目立つと思ひます。あんまり目立

ちたくないの

俺はルナを起こしながら理由を述べた。  
「珍しい、というか不可能なことだよ。一体どういう仕掛けだい？」  
・・・ルナは起きない・・・。

「まあそれは秘密です」

俺はルナを起こしながら誤魔化した。  
「秘密ならしようがないな」

・・・ルナは・・・起きない・・・。

「ええ、スミマセン」

俺はルナを起こしながら・・・起きしながら・・・起きしながら・・・起きながら・・・

ル・・・ナは・・・おき・・・ない・・・

「いい加減に起きろー！ー！」

俺はルナの胸倉を掴んで大きく上下に揺すった。

ゴツンッ

ルナの頭が馬車の天井にぶつかつた。

当たり前だ、狭い馬車のなかで寝ていたルナを上下に揺すればぶつかる。

ルナは頭をさすりながら目を開き始めた。

「おはようルナ」

「・・・」

「もう一回ぶつけようか？」

「アキラ、大変よ」

「よし、何事もチャレンジが大切だな。何が大変なんだい？」

「隕石が降ってきた」

「大変なのはお前の頭だ！」

「隕石注意報よ」

「何そのあるだけあつて結局出番のない注意報！？いつたいジ」の世界で使うの！？」

「私の世界よ」

「どこの独裁者！？アレかな、この世界は自分を中心回っている宣言かな！？」

「違うわ」

「じゃあ何だよ」

「私の頭に世界が広がっているのよ。」

「今度一緒に脳外科行こうか」

「じゃあ何で頭が痛いの？」

「寝ぼけてどこかにぶつけたのではないですか？」

「アキラ」

「なんだよ」

「隕石注意報のアラームどうぞう？」

「まだその話をするの！？」

「どうしよう？」

「ランランルーにでもしなさい」

振り付けをしながら返事した。

「頭大丈夫？」

「お前にだけは言われたくない！！」

マークスさんはまたもや爆笑していた。しまいには「あんたたちお笑いの道を目指したほうがいいのではないか？」と言われる始末だ。勘弁してくれ。

マークスさんを見送り、俺たちは学園へと向かった。

第一感想

「でか・・・」

まあ薄々予想はしていたけど、ここまでは……バブル時代の大富豪もビックリだよ。

外見の特徴としては、戦闘訓練用の広い校庭とは別に、散歩用の庭がある。学校の壁には魔力耐性の高い鉱石を使っているようだ。歩くたびに揺れる大きいダブルメロンに、肩で切りそろえた緑色の髪……って、アレ？

「君? どうしたの?」

「おお……」

いつの間にか俺の前に人がいた。しかも美少女。

「つと、そんなに驚かなくてもいいじゃない」

言葉だけ聞けば、すねている。「怒っている」のどちらかだが、幸い顔は笑っていた。

「あ、すみません。正直ビックリしたので」

「あはは、素直だね」。で、君は何していたの? 制服じゃないところを見ると……観光客? うちの学園も有名になつたものだ。あ、でも中に入るのはNGだよ。関係者オンリーだから

なんかひとりでに納得し始めた。

「ええっと、観光客じゃなくて、今日からこの学園にお世話になる者で……俺はアキラです。アキラ・シグレ。こいつはけいや……

・精霊のルナ・プラネットです」

契約精霊と言おうとしてやめたのは、契約していないからだ。俺はまだ死にたくない。

「精霊つて……その美少女が!?

……やっぱり人型の精霊つて珍しいのか?

美少女に関しては見た目だけとつておこう。  
「ああ、ゴメンゴメン。精霊はたくさん見たことあるけど人型は片手の指ほどしかないから。しかも美少女ときた。隅に置けないね~」  
マークスさんといい、一体何を想像しているのだ……

「おっと私も名乗らないとね。私はリリーナ・リムロック。一応この生徒会長をやっています。気軽にリナって呼んでいいよ。」  
そのしゃべり方は語尾に音符が付きそうなくらい弾んでいた。  
付いている。そしてこの匂い。ルナのようなソープではない、上品で甘いローズの香り。

「ところでリリーナ先輩」

「呼び捨てでいいよ」

「俺は何かしら入学試験を受けなければならぬのですか、リリーナ先輩？」

「そうだけど簡単なことだよ。学園長が私が認めればOK。あと呼び捨てでいいよ」

「具体的に何をすればいいんですかリリーナ先輩？」

「ある者は力を示し！またある者は知恵を示した！それについては個人の自由だよ。あと呼び捨てでいいよ」

「そうですか、ではしばらく時間をいただけませんかリリーナ先輩？」

「いいよ。あとアキラ君はうなのかな？放置プレイかな？残念ながらその程度で私を落とせるなど不可能だよ！」

「その言葉、俺が言いたいですよ！久々にボケに回ろうかな」と思つていたのに、いつまでもツツコミ入れなくて放置プレイですよ！  
俺の心は早撃ちで拳銃を落としたガンマン並みにアセアセですよー！」

「大丈夫だよ。ツツコミという名の銃弾は早かつたから」

「その銃弾は見事かわされてカウンターバレットですよー！」

「私の弾丸は無線で遠隔操作が可能なのだよ」

「どこのファンネル！？オールレンジ可能なー！？」

「？？ ふあんねるつて何？」

おっと危ない。つい暴走してしまった。

無意識なのが首をかしげるリリーナ会長は小動物みたいだった。

本当に年上ですよね？

「よし、決めた」

「？」

いきなり決められても。

「入学試験はこれから私をキュンとさせれば合格！」

「誰得！？」

何の乙女ゲームだよ。つか、俺はそんな主人公スキルを持ち合わせていない。

「大丈夫！親切に簡単な選択肢を用意したから」

「それはありがとうございます」

これなら俺でもなんとかなりそうだ。

「1、愛の告白 2、一世一代の告白 3、世界規模の告白  
「告白統一！？簡単のハードルが高いし！てか、世界規模の告白って何！？」

「世界も搖るがす告白だよ！目指せ！世界征服！」

「もう告白の原型すらないし！告白で世界征服できるなら世界がいくつあっても足りませんよ！」

「愛に勝るものはないのだよ！」

「できればその言葉は違う場面で聞きたかった！」

ああ～、駄目だ、ルナの後にこの人だと精神が持たない。

「・・・リナ先輩」

「！！」

「！？」

なんか反応したぞ、この人。

「合格！！」

「早！？」

「いや、まさか私がドキッとするとは。君、プロだね？」  
「何のだよ！？」

「さりにそのツツコミスピード。師匠は有名な人？」

「ツツコミに有名も無名もあるの！？ツツコミは独学ですー。」

「何！？独学でその腕とは・・・百人に一人の天才だ」

「天才の名をそんなのに使わないで！」

ツツコミなんてこの「天然眠り姫」といれば、誰だって身に付く。  
芸人が泣いて喜ぶツツコミ練習用精霊。一週間後には本当の涙を理解するだろう。

「まあともかくこれで君もうちの学生だよ。学園長の承認も rajinにレツツコー！」

・・・

途中で色々聞いた。

どうやら精霊は多種多様なものらしい。  
あるものは鳥。

またあるものは虎。

もちろん犬や猫などの小動物もいる。

その中でも最も注目されるもの。

それが人間。人型だ。

他の種類は特に関係なく存在する。

しかし人型は魔力が高い精霊しかなることができない。

よつて人型の精霊は珍しく、世界に100いるかいないか、という  
ところらしい。

・・・面倒なことにならないといいが・・・

「ところどどいう生活を送れば人型精霊と会えるの？」  
「こいつと出会ったのは偶然のようなものでして・・・」  
「間違いではない。こっちの世界に来たら偶然出会ったのだ。多分・・

・  
「ふうん。それにしてもルナちゃんは相当な天然だね  
「分かります?」

さつきも野球らしき遊びをしている男子学生が、誤つてボールをこちらに飛ばしてきたのを拾つたところを、「すみません、ボール回してください」と言われたものだから、凄い勢いでカーブ(回す)掛けで返した。

その後スカウトが来るわ、来るわ。の中にどしゃくとに紛れて告白したやつもいたな。

それを何に勘違いしたのか「アキラに聞いて」と言つて、巻き込まれた俺。

しかしあのカーブは凄かつた。

スピードA

コントロールS

スピンドA

メジャー入りできるぞ。

その本人は何か上見ているし。

「どーした?」

「アキラ」

いきなりルナが踊りだした。しかも「ランランルー」って・・・頭大丈夫か?

「アキラ君!上!避けて!」

「ふえ?」

上を見ると女の子が・・・女の子が・・・

ズドーン

? 落ちてきた。

## 学園と隕石注意報（後書き）

とつあえず「」まではストックがあるので、早めの更新です  
次回以降は遅くなるかもです

早速お気に入り登録していただいた方、ありがとうございます

誤字・脱字があったらお願ひします

## 入学は縞パンに彩られて

あれ？周りが暗いな・・・  
しかも体が重い・・・死んだのか俺？

いやいや、開始して三章で終わりってないだろ？  
手を伸ばせ 神よ、この俺に蜘蛛の糸を掘ませてくれ

ムニユ

ムニユ？

俺の手には不思議な感触が  
手に収まる小さな柔らかみ  
こんなものこの世に存在しているの？  
ああ、アレか、この世界にしかないやつだな  
そして鼻に漂う甘酸っぱいラズベリーの香り。  
俺は生きているのか？

「ひー・・・・ひの・・・」

アレ？なんか聞いたことのないソプラノボイスが聞こえる。  
何はともあれ俺は生きていた。  
安心して目を開けると

「この変態があーーー！」

ドゴッ

一瞬でよく見えなかつたが、俺の前には赤髪ツインテールと

(これは・・・伝説の・・・)

縞パンだけが見えた。

「はー！ 編パン！ ？」

よくわからぬいか俺は急に田中が覚めた。

「アキテ、繪パンって何?」

「いや、実はさつきの女の子の……」

スパツ

あれ? 何か頬がヒリヒリするな。まるでナイフで切られたような・・

俺はかすかに残つている理性で後ろの壁を見た。  
壁にはナイフ・・・ダガーナイフが

—

「ダガーナイフ」

ダガーという呼び名は、古代ローマ帝国の時代に属州だったダキア地方（現在のルーマニアにあたる）の住民たちが使用していたこと

に由来する。日本刀の種類と比較すると小太刀・脇差より小さく、短刀や匕首、俗に言うドスなどに近いサイズである。

刺すことと投げるのに向く。小さいので人体の急所を的確に狙わないと致命傷を与えないため、武器としての絶対的な威力はありません。とはいえ、中世のヨーロッパの騎士のようにブレードアーマーで徹底的に装甲された敵兵に致命傷を与える場合にはツーハンデッドソードやバイクなどを使うよりも、相手を地面に倒して装甲の隙間からダガーを突き刺す方が効率的だつたため広く用いられた。このような重装騎兵へのどぎめ専用に進化したダガーがステイレットである。また重装騎兵に限らず戦場で致命傷を負った瀕死の負傷兵にどぎめを刺して楽にしてやるために用いられたダガーは「ミセリコルデ」（どぎめの短剣、慈悲の短剣）とも呼ばれる。

補助的に使用されることが多いが取り回しが容易く携帯にも向くため、初期の連射性の低い銃器を使用する銃兵等も所持していて、これが後の銃剣に発展し、第一次世界大戦における塹壕戦で多くの命を奪つた。

近世ヨーロッパの剣術の中には利き手にレイピア等の軽量剣を、もう片方にダガーを持ちダガーで相手の剣を受け止めたり払つたりしながら利き手の剣を繰り出す物も存在する。この種の剣術はスペインとフランスで特に発展した。このような使用法を念頭に作られた防御用ダガーは特にマインゴーシュ、パリーイング・ダガーなどと呼ばれる。また相手の剣を挟み取るなどの破壊することに特化したソードブレイカーも、こいつた防具としてのダガーから発展したものである。

左手用のダガーの中には相手の剣を受け止めやすい三本刃のものや、鍔が剣を受け止めやすい形状になつているものも少なくない。

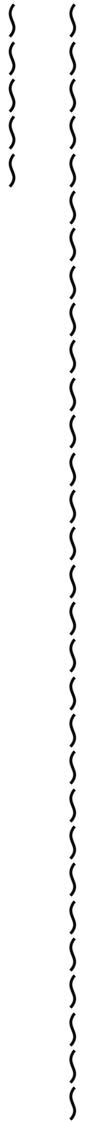
ルネサンス期のイタリア各都市国家などのヨーロッパ諸国では、護身・装飾・食事用具（当時は食べ物をナイフやダガーで切り分け、手づかみやナイフ・ダガーで刺して食べる方法が主流であった）としてダガーを腰やブーツに差すなど見せる形で携帯することが流行

した。

ダガーは専ら対人武器として作成されたものを指し、対してナイフは一般に多目的切断具である。対人戦闘を主目的としない場合には諸刃はあまり意味が無いので、日常的な用を足すための道具であるナイフの多くでは、刃は片側のみである。

ただし、諸刃状の刃物自体は旧石器時代から見られ、ダガー型のナイフは片側に別の刃付け（荒めに研ぐ、角度を変える等）を行うことで、鋭利な片側で纖細な作業を行い、荒い研ぎの側でロープをこすつて切断するなど、1本で2種類の用途に使用できるという利点もあり、ダイバーズナイフにはダガー型のものも多く見られる。特にプロコース（専門家が使う道具）のものでは、あらかじめ片側が鋸刃になっているものもみられる〔1〕。また緊急時には刃の向きを確認せずに使用できる。

ダガーは左右対称であることに関連して、観賞用ないしコレクション用のナイフの題材としても選択される。これら観賞用ないしコレクション用のナイフでは、実用性よりも装飾性を重視しているが、そういうたナイフもナイフとしての基本的な機能を持つているか、その機能を持たせることが可能な場合もある。各国の伝統的な刃物はダガー状であることが多い。



・・・はーつい現実逃避をしてしまった。

俺の知っているダガーナイフの知識。今のケースに当てはめると「投げナイフ」ということになるな。  
てか俺の知識スゲーな。

「ごめんなさい、手が滑ってナイフが飛んでしまったわ 死んだ？」  
「謝りと同時に生死の確認つてどんなコンボ？」

俺の目の前には「貧乳ツインテール〔縞パン装備〕」がいた。

貧乳ツインテールが現れた。

アキラはスカラを唱えた。守備力が50上がったような気がした。

貧乳ツインテールは笑顔のままだ。

アキラはピリオムを唱えた。逃げ足が150上がるといいよね。

貧乳ツインテールは右手にナイフを構えた。

アキラは逃げた

しかしナイフに囮まれた・・・ナイフ？

「ぎゃああーーー！」

俺の周囲の壁にナイフが刺さつた。

「ごめんなさい、手が滑つて殺そうとしたわ 死んだ？」

「おかしいよね！滑つて殺しそうになつたらマリオカートはR18指定になるわ！バナナをナメんなよ！」

「まりお・・・かあと？」ごめんなさい、理解できなくて殺すわ

「ストップ！ストップ！理解できなくて殺人衝動が起きたなら、世界は赤一色だよ！」

ヤバイヤバイ、貧ツインの目がヤバイ。

「フィアちゃん、冗談でも殺すなんて言わないの」

リナ先輩惜しい！確かにその通りだけど、「冗談」と「本気」は違うから！

「分かりました会長。冗談（・・・）で、は言いません

「うん、素直でよろしい」

俺は初めて言葉の恐ろしさを知った。

・

「こほん・・・では改めて、彼女の名前は」

「フィアル・ホークズよ」

貧ツイン・・・改め「フィアル・ホークズ」はリナ先輩の紹介を遮つて名乗つた。

「ちなみにツンデレ!」

「ツンデレじゃありません!..」

あれはツンデレの発言だな。

二人の言い合ひを眺めていると、ルナが話しかけてきた。

「アキラ」

「ん? なんだ?」

「自己紹介つてなんて言えばいいの?」

「そうだな・・・とりあえず俺と同じようなこと言え

ビうやら収まつたようだ。心なしかフィアルの顔が赤いような・・・

「じゃあこっちも行つてみようー・ビうやー!」

「転校生のアキラ・シグレだ」

「転校生のアキラ・シグレだ」

「ちょっと待て」

俺はルナの肩を叩いた。

「何?」

「人は誰にだつて間違いはある。それは精靈も同じだ。よし、気を取り直してもう一回」

「謎の転校生です」

「何があつたのかな!?」

リナ先輩がマークスさんと同じ状況に陥つている。フィアルなんかがパチクリして忙しそうだ。

「だつてアキラが同じよつなこと言えって・・・」

「分かつた。百歩譲つて俺が悪いとしよう。しかし気になるのはその先だ」

「アキラ」

「なんだよ」

「先のことは誰も分からぬわ。今を見ないと」

「大丈夫だ。俺は今を見て冷静に判断している。それより後半の謎の転校生というキー・ワードはどこからきた?」

「なぞときは?」

「ディナーの後でと言いたいのかな?・・・でか、何で知っているの!?」

まさか・・・こいつも・・・地球

「事件の後よ」

「それ以前の問題だつた!?」

「こいつはバカだった。それなりに長い(?)付き合いでたのに気付かなかつたとは。しかし少しでもこいつを信じた俺はもつとバカだ。

「こほん・・・では改めて、アキラ・シグレだ

「ルナ・プラネット」

「普通に言えるし!今こいつ俺の顔見てドヤ顔したぞ!?

「つねに無表情のこいつの場合、あまり分からぬが、俺には分かる!顔は美少女だからドヤ顔したら一部は「萌え」とか言つかもしないが、俺の素直な感想は「イラツ」だ。

「あんたたち・・・カップル漫才でも目指しているの・・・?」「フィアルまで言つてきた。どうすんだよ!と目でルナに訴えると、あいつはかすかに頷いた。これは初めて以心伝心した

「夫婦漫才よ」

「「発展した！？」

今のは、俺とフィアルだ。こいつ、できる。  
「何よ」

「ナンデモアリマセン」

急に睨んできたから、つい棒読みになつた。あいつ鋭いな。

「とりあえず、これでお互いの自己紹介は終了」仲良くしようね。

「ええ、よろしく、ルナさん」

「よろしくフィアル」

「では会長、私は教室に・・・」

「ちよつ、俺には！？」

「殺すよ、変態さん」

「殺人予告！？」

そりやないよ！こつこほ心当たりが！・・・あります。

「それじゃ一人とも、指示された教室に行つて。二人とも一緒にから

リナ先輩からの指示。ホント手が早いな。

「で、ルナさんはどこのクラスなの？」

「アキラ、どこだっナ」

「2・Bだな」

俺はここに来る途中（気絶前）にリナ先輩から教えてもらつたことを思い出す。

・・・思わず縞パンを思い出したのは秘密である。

「へえ、偶然ね。私も2・Bなのよ。」

「そう」

「へえ、そつか。こいつも2・B・・・

「え？」

・

・  
「んじや、転校生を紹介するぞー。」

「アキラ・シグレです」

「アキ」

「ゴスツ

「ルナ・プラネット」

さあ、整理の時間だ。OK・OK。そう慌てるな。場所?ここは2-Bだ。

俺の右隣にルナ、左隣に担任の「コルト・パーク」先生。ちなみに男。期待した諸君、残念だつたな。

次に周りだ。

たくさんの生徒の中には、仏頂面のフィアルも見える。  
そして目の前には約30名の生徒の視線が集まる。  
ルナに。

「えー・・・、薄々みなさん気になつてゐるルナさんですが、実は  
アキラさんの精霊です」

その言葉が終ると同時に、周りが騒ぎ始めた。

「精霊だって」

「精霊持ちかよ」

「しかも人型だし」

「あんなに可愛いのに精霊かよ」

「くそー、あの男羨ましいぜ」

俺に視線が移つた時は妬みの視線だった。ありがちな展開だな。

「んじや、お前らの籍は・・・」

「先生、これ以上火に油を注ぐ行為はやめてください

「あれ？違うのか？」

「本気だつたの！？」

「冗談だ」

「ピッククリさせないでください・・・」

「2割は」

「ほほ本気だ！」

これ以上ツツコミ入れたら過労死で死ぬ。今日で何回ツツコミいたよ？

てか思つたけど、この世界でも「火に油を〜」って通じるんだな。

「アキ・・・」

「ルナ、これ以上俺を困らせないでくれ」

「ライ」

「次元超えた！？」

何そのギリギリカーブ！？いきなり次元を超えたボケになつたよ！  
おい作者！お前まで俺を過労死に追い込むつもりか！？

（閑話休題）

「よし、少しばかり落ちついだぞ」

「アキライ」

閑話休題

（・・・あのな、物語には法則があつてこの場合は決してリアルの話に触れていけないわけであつてそりや確かに前は -  
～しばらくお待ちください～

天然キャラで固定されているがそれにも限度がある確かにミスつたらDriック&Back Spaceで消すことはできるしかしだな  
～しばらくお待ちください～

それでもやつていいこと悪い事があるそれを分かるよつこなれそして謝れ

（ごめんなさい）

「で、先生、俺たちはどこに座ればいいですか？」

「ん~そうだな。後ろの席空いているから、そこにはプロネットが座れ」

「はい」

「んじや、授業始めるだ~。今日も」

「ストップ！」

「おいシグレ、授業中だぞ、席に座れ」

「その言葉に違和感を持つてください！」

「お? そういえばお前の席は紹介してなかつたな」

「何その自然なボケ! ?」

「アキラ、早く座る」

「ちょっと黙つてね?」

「アンタ、早く死ね」

「なんで殺意むき出し! ?」

前者はルナ、後者はフィアルである。

「てか、お前まだ根に持つているのかよ・・・」

「あ、当たり前でしょ! あんなコトされて許せるわけがないでしょ

! ?」

「ん? お前たち、あんなコトつてなんだ?」

コルト先生の顔が面白いものを見つけた子供の顔になつてゐる。

「おい! 転校生! テメー、フィアルさんに何した! ?」

「そうだそだと他の男子が騒ぐ。お前ら何者?」

確かにフィアルは美少女だ。あんな出会いではなければ俺だつて・

・ヤバい、出会いを思い出した。

「べ、別に何もないわよーそりみね、アキラー?」

おーい！焦つて呼び捨てになつてゐるぞー！余計怪しまれるだろー！

しかもそこで俺にバス回すのかよ！？俺にフォロー入れると！？

クソッ、こうなつたら俺の本氣をみしてやるー準備はいいか？ゲー

ムスタートだ！

「ああ、ただ少し・・・」

「あんなコトつて、アキラがファイアルのパンツを見たこと？」

## ゲームオーバー

「ル、ルナちゃん！」

「ほお～、やるな～シグレ

「き、貴様！」

「何て羨まし・・・ハレンチな！」

「それで！一体何パンツだつた！？」

「アキラ、縞パンつて何？」

「「「ブハッ！！」」

クラスの男子8割が出血多量。女子は頬を赤く染めている。

「アキラ君？ちょっとといいかしら？」

「話せば分かりあえると俺は信じている」

その後俺は廊下で「死ぬ魔法のパンチ」をくらつた。その時俺は思つた。

ああ、このパンチ、名をつけらるなり

死魔パン

？

## 入学は縞パンに彩られて（後書き）

今回は早めに仕上げました

少し無理があつたかも・・・

誤字・脱字があつたらお願ひします

## 初めての相手はシンクトレ少女ー?（前書き）

訂正して思つたこと  
ワードで書いてそのまま「ペー &貼り付けするので、変な個所が多  
かったのだと考えました  
以後、気をつけます

あと、編集中に気になつたところを直したので、少し文章が違くな  
っていますが」「承ぐださ」

## 初めての相手はシンテレ少女！？

あの後、俺は痛みと視線に耐えながらホームルームに参加した。  
そして授業が始まった。ここまでにはOKかな?  
ここからだ。

今日の一時間目は歴史。無知な俺には大切なことだ。  
その後の先生の発言が、

これだ  
ワン  
ツー  
スリー

「今日は予定を変更して模擬戦やるぞ～」

おかしくない?

しかも俺のところ見てニヤッと笑つたし。おまけに相手は自由で見

学も可だと。つまりほぼ自習だ。

俺?もちろん見学の予定だ。他の人の実力もみたいし。  
ここまできたら予想している人もいるものでは?

「ええー、これより」

そう、言わずともアレのパターンだ。

「シグレと」

それは良いとして、

「ホーグズの」

もしこの状況を開拓できる人がいたら、  
「模擬戦を始めるぞ」

・・・変わってくれ

「アキラ、何で現実逃避しているの？」

「何でお前は落ち着いていられるの？」

「私、この戦い終わったら言いたいことがあるの」

「やめて…ここで死亡フラグ建設やめて！」

「トイレ行きたい」

「今すぐ行って来い！」

・・・  
「さて、そろそろいいかしらあ？」

あまりにイライラしそぎてフィアルさんの語尾がおかしい。  
何故こうなったか、気づいている人もいるかもしれないが一応説明  
しよう。

- 1、対戦相手は自由
- 2、フィアルさんは俺に御熱心
- 3、笑顔で一言「殺らない？」
- 4、冷静に一言「喜んで」

だって怖いつたらありやしない！断れないよー目が笑つてないし！  
チキンとか言つなよ！

「初めていいならこつちから行くわよ。ポルン、武器化！」  
フィアルの肩に急に現れた猫型精霊「ポルン」が光となつて、両腕  
に張り付いた。

光が收まるとフィアルの両腕には籠手のようなものが、そして何も  
ない空間から「ダガーナイフ」が出てきた。

現実逃避のために説明しよう。

この世界には精霊は存在するが、契約しているのは一部だけ。それはここ的学生も例外ではない。

その代わりをしているのが「仮精霊」という機械だ。

形は様々だが、目的は一つ、武器の収納。

精霊はもともと武器の形は決まつていなし。本人に合わせて武器化する。

俺の場合は日本人だから刀なのだろう。ここでは珍しい剣と評価されているが。

つまり精霊持ちは珍しい方である。この学園でも10人位とか。そしてフィアルは後者、精霊持ちである。しかし精霊は基本一緒にいるわけではない。

必要なときに呼ぶ。これが普通らしい。

まあ、人型は例外だろう。

俺が知っているのはこれくらいだ。

「死んだらごめんね」

爽やかな笑顔で死刑宣告した処刑人の攻撃で、現実逃避は無理矢理に切断された。

ナイフが右から3、左からも3、合計6本飛んできた。

「先生！死んだら責任とつてくださいよ！」

狙いは俺だけだったので、大きく右に飛んだ。

ちなみに外したナイフは空を切つて、先生の張った結界に防がれた。この結界のせいで俺も逃げられない。

「ほら、さつさと武器化したら？」

フィアルは一文字につき一本の割合で投げてくる。今は14本だ。え？2本多いって？句読点と記号も含むのだよ。2、4、6、8、

10、・・・12本だった。

「ほりーほりーほりー」

「ファイアルさんの目がヤバイ。もう『殺』の色で染まっている。

「あー、もう！ルナ！行くぞ！」

俺はナイフの嵐から上手く逃げてルナのもとへ走った。

この世界では「契約なしでは武器化できな」「ヒツルールがある」とは前回で身をもって知っている。

したがって、離れてもできる武器化をわざと近くでやる。メンズへアドバイスで近づくといいな。

「おにじつこう」

「この状況下で…？」

「接近させないわよ！」

また俺に向かってナイフが一直線。俺は、某狩りゲーようにじく前転回避・・・つて

「ちょっと待て、ファイアル！」

「何よ！？」

「お前さつきから俺しか狙ってないだろう！…？」

しかも全部頭狙い。何でそんなに殺意込めているの？すると「何を今さら」と聞いたげな顔をした。

「それが？」

「もはやキッパリ！？」

認めたよ…そしてそれが正しいのかのよひに黙こもったよ…。

「いやいや！普通は武器化するルナを狙うのが妥当でしょー？」

「私、あなたに夢中だから」

「その言葉、違う場面で聞きたかったよ…」

こいつにテレはあるのだろうか？そして、もしテレが出た時に俺の首は繫がっているのだろうか？

「ルナ！冗談抜きでマズイって！頼む武器化してくれ！」

ナイフでファイアルの動きが見えないほどの攻撃を、某狩りゲーのハリウッドダイブで回避し、再びルナのもとへ来た。

「アキラ、どこ？」

「冗談抜いたら俺消えるの！？俺は冗談100%なの！？」  
きりがないのでルナの片腕を掴むと、ファイアルに向かつて走つていった。

「うおおおー！」

「ちょっと、あんたバカなの！？」

どうやら俺が自滅すると思ったのか知らんが、ファイアルが攻撃の手を緩めた。

「もうっ、たああー！」

「つーー！」

何かを予感したのか、ファイアルはその場でナイフをクロスにし、ガードの構えを取ろうとした。  
でも少し遅いな。

ガツッ

金属と金属がぶつかる鈍い音がした。ファイアルのナイフの間には、特殊な形をした剣、太刀が止められていた。普通なら間に合つたが、使い手の差で間に合わなかつた。

俺はそのままバックステップをし、少しだけ間合いを取つた。

「つづーー！あんたどこまで異常なのよー！」

「は？」

質問の意味が分からぬ俺はマヌケな声を出してしまつた。  
「は、じゃないわよ！武器化の時間が早すぎるでしょー！」

「あ・・・あ〜、そりゃ死ぬほど練習したからね〜」

嘘が顔に出ないよう気をつける。どうやら俺の（ルナの）武器化スピードは異常らしい。

当たり前だ。武器化する時の過程である、「体内に精靈を流す」を省略しているからな。

普通の人は、そこから自分で構成する。

その必要のない俺たちは、結果的に速いのだ。

ギヤラリーも静まりかえっているし、コルト先生は楽しげな顔をしている。

「今の一秒以内よね・・・、あの英雄トルでさえ1・2秒だったのに・・・」

英雄なんていたのかよ。この世界に何があったの？

「・・・ええっと・・・先手必勝！」

「なつ！？」

ボロが出る前に特攻を仕掛けて誤魔化した俺。

卑怯ではない。戦略だ。

脚力任せに足を踏み出し、一気に間合いを詰めた。この世界に来てからというもの、日常が命の殺り取りだつた俺は、結果的に実践による技能を身についた。

ちなみにフィアルの声が出たときは、もう田の前まで詰めていた。

「くつ！」「

条件反射か経験のおかげかは分からぬが、フィアルはギリギリのところでナイフを出して防いだ。

さつきよりも勢いがあつたため、今度は鈍い音だけではなく火花も散つた。

「くつ・・・ホントにあんたって奴は・・・」

「お・・・お前だつて異常だろうが・・・」

金属どうしがぶつかり合つてゐる中、ファイアルの力が異常なことに気づく。

「こいつは確かに強い。だけど女には変わりない。それなのに男の俺と対等の筋力。おかしいよな？」

「「くつー」「

二人同時に押し合い、間合ひを空けた。

「この規格外・・・一体何者よ？」

「そうだな・・・」

一瞬「通りすがりの仮面ライダーだ。」と言おうとしたが、場違いなのでやめた。

「バカな精靈とただの異世界人ですが」

「異世界人・・・まあ確かにあんたに常識は通用しないわね」

おいおい、人を化け物みたいに呼びやがつて。俺そんなに異常か？

「詰められると厄介ね・・・それじゃ！」

睨みあいに痺れたのか、さつきと同じナイフの嵐を使つた。

「刀があればこの程度！」

刀をムチのように振り回す・・・ことはできないので、弾いて避けて、弾いて避けての繰り返し。

「どうだ！」

俺の体は見事ズタボロ・・・あれ？ズタボロ？

「・・・つーいってえーーー！」

実を言うとナイフが特殊な曲がり方をして防ぐことができなかつたのだ。

「私は同じ技を使うほどバカじゃないよ。」

ファイアルが得意げな顔をしている。なんだ？一体どういう仕組みだ？

「それじゃ、第二刃、行くわよー」「ナイフの嵐が迫る。

「やば！・・・あれ！？」

転んだ。転んだ。大事なことではないけど一回説明しました。  
何かを踏んだらしい。こんなトラブルがあつてもナイフは待つては  
くれない。

「ちょ！タンマ！ストップ！」

焦つて出た願いもむなしく、俺の体に突き刺さる。

「痛い！痛い！痛い！先生止めないの！？」

「何を言つている？ここからの挽回だろ？」「

「先生は俺に何を期待しているの！？挽回だけに卍解すればいいの  
！？」

「ばんかい？バンカイ？どういう違いだ？」

「大丈夫です。死神にならない限り関係ありません。」

と言つ俺は、もう死神になりかけている。  
見た目は元気そうだが、かなりのナイフが体に刺さつていて。これ  
授業ですよね？

（やば・・・これホントに卍解しなくちゃキツいな・・・）  
体が痛い。生きているのかも疑問に思えた。ああ、おばあちゃんが  
見える・・・

「そりいやアキラ、お前“魔力循環”しなくていいのか？」

「「は？」」

今のは俺とフィアル。前も息が合つたな。  
でも今は一人だけではなく、ギャラリーの一同も口を開けている。  
「いや、お前魔力循環してないだろ？それでよく体動くな〜って。」

関心感心とつなげて言葉を切った。  
え？ 何その魔力循環つて？

「あんた・・・魔力循環してないの・・・？」  
よく分からんがこの空気・・・やるしかない。俺は悲鳴を上げる体  
を無理に起こした。

「・・・ふつ、見せてやろ。これが俺の・・・卍・解！」

「なつ！？」

「お？」

最初が俺。次がファイアル。最後がコルト先生である。

「・・・あれ？」

何も起きない。何も変わらない。

「おいルナ、何か違和感はないか？」

「トイレなら行つてきたわ」

「誰が尿意の心配をした！じゃなくて、なんか体が疼くとかそんな  
感じの！」

「傷が疼くわ」

「何の！？ いつの！？ 誰にやられたの！？」

「・・・そんなの言えるわけがないじゃない」

「・・・そうか・・・ゴメン」

ルナは俺と会う前からあそこにいた。何があつてもおかしくないな。  
失言だつた。

「保健室にいた猫に引っかかれた傷よ」

「言つているし！ しかも軽いし！ 僕が気絶している間何があつた！

？」

「リナ先輩がナイフからアキラを護つていたわ

「テメー何しやがる！？」

「何の話よ！？」

「お？」

おつと、今のルナの声は俺にしか聞こえないのか。メモメモ・・・

「それよりもあんた！」

「なんだよ？」

体が限界に近い俺は、田で見ることで済ませた。

「魔力循環をしてないつて嘘でしょ！？」

「ええっと、魔力循環って何？」

何その新スキル？とか・・・

「ルナ！お前何で教えてくれなかつたの！？」

そんな便利なスキルがあつたなら、俺はあんな苦労をしなかつたのに。

「私も知らない」

この反応は本物だな。

「それじゃあ・・・、その力は素なの！？」

「まあ、その・・・素だな・・・」

「・・・」

「これはまた」

「「「マジかよ・・・」」

・・・もしかしてそれって常識なの？

俺はさつき押し合いをしたフィアルの力を思い出した。なるほど、だからか。

そろそろ空気が重くなつてきたので、コルト先生に向かつて言つた。

「あの～・・・俺、体が限界なので降参します」

これは本当だ。マジヤバイ。

「黙秘する」

「はあ！？」

「だつてここまでおもしろくなつたのに、何で終わる必要がある？

「何でそこに疑問を浮かべるの！？」

あんた本当に教師かよ！？この世界の就職システムはどうなつている！？

「それ以前に魔力循環はこの学園に入る最低条件だけど」

「え？」

え？ そんなの聞いてないぞ？

「当たり前だろ。お前、入学受験受けたよな？」

ヤバイ、俺の顔凄くマヌケな顔していると思う。

「あんた、まさか」

「何を言っている！ 俺はまだ動けるぜ！」

ファイアルの声が真実に触れる前に叫んだ。ついでに体を起こした。ミシッと音がしたのは無視しよう。・・・痛い。

「だろ？ それじゃあ試合続行だ」

笑顔でコルト先生が告げた。Sだ。鬼だ。

「体から血が垂れているけど・・・」

「朝食べたトマトスープだな」

「目が虚ろになっているけど・・・」

「これは魔眼だ」

「頭にナイフ刺さっているけど」

「これ実は一つに割れるブレードアンテナなのだよ。光るぜ！ 紅く光るぜ！ デストローヤ！」

最後のやつはここでは通用しないガンダムネタだな。俺はここで応援する。

そんな俺を悲しい人を見るような目で見る。

「それじゃせめて速く終わらせましょう

ナイフを投げる構えをとった。この体、もってあと3分だな。ファイアルの手がナイフから離れた。さて、少し忙しくなるぞ。

俺はしっかりと見る。そして体に指令を送る。それだけだ。ナイフが近づく。そしておかしな方向に曲がり攻めてくる。

(左手を左角46度に展開 1・2秒後に閉じる)

予測不能のはずのナイフが、吸い込まれるように左手に収まる。

(太刀切り払い 後に背中に構える)

一斉に前から来たナイフが太刀によって払われる。その後、背後から来たナイフを太刀が防ぐ。

(ステップを前に踏む その後瞬時にしゃがむ・・・いや、飛ぶ)

体を前に進め、体を浮かす。すると先ほどいた場所には上からナイフが降り、体の真下にナイフが過ぎて行つた。この時間、およそ3秒。

跳躍後、すぐに地を蹴り、間合いを詰めた。

そして現在、太刀の峰はフィアルの首に触れている。

「え？え！？」

状況についていけないフィアル。

「・・・」

それを黙つてみているコルト先生。

「・・・へ？」

もはや何が起こったのすら分からぬギャラリー一同。そこに俺の一言。

「あ、キメ台詞忘れた」



## 初めての相手はシントレス少女ー? (後書き)

初めての真面目な戦闘シーン

云々にくかつたらスマスマセん

あと、テスト期間に入るので一週間ほど更新できません

誤字・脱字あつたらお願ひします

## イレギュラーという実感（前書き）

テストが終わつたので更新しました

今回は見直しをしたので多分大丈夫かと・・・

## イレギュラーといつ実感

俺は今現在、学園長室にいる。隣には順にルナ、フィアル、なぜかリナ先輩。

左の本棚近くにコルト先生がいる。

そして俺の正面。

学園長のエリザベス・ホワイト。

「さて、そもそも話してもらおうか?」

学園長の口が笑う。目は変化なし。

「何を話せば?」

「心当たりがないのかい?」

「いっぱいありすぎて」

「そうかい。それじゃあ全部だ」

「プライバシーの侵害ですよ」

「不法入学はプライバシーの侵害ではないのか?」

それはリナ先輩が原因だろう。チラシと見ると、手を合わせている先輩と目が合った。

「さつきの戦いのことですか?」

「分かっているではないか。」

どうやら異世界人ということは冗談で通されたらしい。

「と言わても、どこから話せば」

「では」ちらから質問しそう

そういうと一度咳払いをし、口を開けた。

「その眼は”魔眼”なのかい?」

・・・そういうことが。ついこの世界にそんな物騒なもの存在す

るのかよ。

「学園長はどう思います?」

「そうだな。話を聞く限りでは、ファイアル・ホークズの技を完璧に避けきつたらしいな。」

そこで一旦間を置く。

「そうなると”先読みの魔眼”か”解析の魔眼”か”分かりやすい名前だな。ツツコミを入れるところもない。あえて言うなら”シンプルすぎだろ!?”だな。

「で、君はどうちだい?」

おもしろそうな目で俺を見る。その目には何か期待しているかの様にも見える。

「俺は・・・」

みんなが俺を見る。

俺は

「魔眼なんて持つてませんよ?」

「「「「は?」」」

「ふあああ・・・」

その場は4人のマヌケな声とルナの欠伸で支配されていった。

・・・

「コホン・・・それじゃあ、あれは特別なことはしてないと?」

「ええ、まあ」

当たり前だ。魔眼なんて今初めて知ったからな。

「ということは、お前は自分の力でやったのか?」

「力というほど大げさではありませんよ。ただ「見て」「予測」し

て「動いた」だけです。」

こんなのは普通だろ？ ドッジボールだって見て「捕る」か「避ける」かのどちらかを選択する。

テニスだって「フォア」か「バック」か「ネット」を選択する。 フィアルだって俺の動きを見てから「投げる」を判断し、タイミングを見計らって「ナイフの嵐」を使った。

同じではないか。

「ただ、って・・・お前なあ・・・」

はあ、と盛大なため息をつかれた。今のため息はコルト先生だ。

「となると、どちらかと言づと”解析の魔眼”に近いな  
いや、だから魔眼では・・・」

「ちなみに前の解析したフィアル・ホーグズの技は？」

「え、ああ」

俺はゆづくりと記憶を掘り出す。

「簡単ですよ。ナイフとナイフをぶつけるだけでしょ？  
一応本人に確かめる。

「え？ あ、そ、そうよ」

なんかオドオドしているな。いや、ビックリか？

「そこまで分かった上での君の対策は？」

「対策というか、ナイフは一直線にしか動いてないので、コースを  
読んだだけです」

「一番シンプルで一番難しい対策だな」

Simple is best. 俺この言葉好きだわ。

「とりあえずは解決した。次は・・・」

学園長の目がリナ先輩で止まる。その後、リナ先輩と一緒に質問攻

めされたのは余談である。

学園長室から出て、リナ先輩は生徒会室へと向かった。なんでも仕事が溜まっているらしい。俺は疲れが溜まっているよ。

「で、野獸

「せめて人であつてくれ

フィアルの不意打ち。野獸つてなんだよ・・・。

「それじゃ変質者

「人だつたらいいわけではないよ！？」

俺は一体どんな目で見られているのだ！？

「あなたのその眼、ホントに魔眼じゃないの？」

「ああ、残念ながら魔眼じやない

魔眼。いい響きだ。欲しいな・・・。

「・・・あんた意外に凄いやつ？」

「基準が分からぬいけどな」

この世界のことが分からぬまま戦うのはマズイかも。授業、真面目に受けよう。心でそう誓つた俺は、今授業をやつている我がクラスへと足を運んだ。

・・・

少し遅れた俺たち三人はクラスメイトに不思議な目をされたが、先生は普通に対応してくれた。

おそらく学園長から事情は聞いているのだろう。ちなみに今の教科は一時間目にできなかつた歴史だ。

教科の先生にアイコンタクトしてから、俺に続いて一人も座つた。色々と考えたいことがあつたので、窓際だつた俺は外を眺めてボーつとしていた。

しばらくすると、授業の終わりを告げる鐘なつた。

生徒が席を立ち、背伸びをしてから終わりの挨拶をする。

休み時間になつてもやることがない俺は机で寝ようとした。その時

「なあ、ちょっとといいか?」

「は・・・い?」

振り向くとクラスメイトが大勢いらつしゃつた。

「さつきの戦いだけどさ!」

俺は関係者である二人の姿を探す。

入口を見ると、ちょうど扉に手を掛けたフィアルがいた。

その手の先にはルナの手が。

俺と目が合つとフィアルは手で「じゃーね」と会図をして出て行った。

(あの女、裏切りやがった!)

そうしてクラスメイトの波に溺れる俺。

・・・何か扱いひどくない?

その後の質問攻めはきつかった。大事なことなので二回三回。きつかった。まあ、適当に流しておいたが。

次以降の授業は考え改めて真面目に受けた。

この世界の教科(この学園の教科)は「歴史」「数学」「語学」「創策」「実技」がある。「語学」は国語のようなものだ。ここには「理科」「科学」がないらしい。そして「創策」。これは文字通り「策を創る」授業だ。実戦で体を動かすのは「実技」頭を動かすのは「創策」ということだ。

四時限目の授業が終わり、昼休みを迎えた。さあ、飯だ。

クラスメイトの一部がいないのは購買争いにいったのだろう。  
しばしの休息を手に入れた俺は重要なことに気がついた。

「昼飯買わなきや・・・」

同じ思いをしているルナを拾って戦場へ行くために、ドアに手を掛ける。と同時に声がかかった。

「あんた、ちょっと付き合になさい」

フィアルの告白。

「僕たちはまだそういう関係では」

恥ずかしい素振りで返事する。

ドゴッ

「いいかしら？」

「もちろんです」

俺は顔に赤い跡をつけながら購買へ行き、後に中庭に向かった。なんでもオススメの休憩場があるらしい。

購買？ フィアルとルナがいればガラ空きも同然。みんな譲ってくれたよ。

代償の俺への背中に刺さる殺氣は辛かつたけど

フィアルのオススメスポットは中々だ。

中庭の奥に木で囲まれたエリア。風通りはいいし、木で少し遮られた日の光は幻想的だ。

そこに腰をおろし、昼食をとる。

今日の昼飯は日本で言うカツサンドと焼きそばパン、それとフルーツジュースだ。ルナはハンバーガーみたいな食べ物とカツプサラダ、飲み物は紅茶。

「で、話していいかしら？」

サンドイッチを一口食べてからファイアルが口を開いた。サンドイッチには猫がかじったのではないかと思つほど、小さな食べ跡が。

「うううとこは女の子だな。

「で、殺していいかしら？」

「話が変わっているよ！？使い回しみたいになつていてるし…」  
「こいつこそ魔眼もつてているだろう。人の心を読みやがつて。

「…・話に戻すわよ」

カツブジュー斯を一口飲み、続けた。

「アキラ・シグレ。ルナ・プラネット。私と一緒にチーム組まない

？」

「チーム？」

「もぐもぐ…・

聞きなれていればずなのに思わず聞き返した。ルナは現在進行形で  
食べている。

「そ、チーム」

またサンドイッチをほおばる。本当に小さい口だな。あれで限界な  
のか？

「こ」の学園では個人力よりチーム力、団体戦を重要視しているの。  
そこで3人1チームを作つて対抗戦をする。それがこここの伝統行事  
の一つ、”組織戦”

確かに個人戦より団体戦の方が、この先多いだろうな。

「時期は春、夏、秋、冬の季節につき一回。年に四回行われるのよ  
」どうやら季節と日時の数え方は日本と変わらないらしい。

「なるほど。で、ファイアルはチームができなかつたと。」

「う、うるさいわね。だつてみんな避けるのよ。寄つてくるのは下

心丸出しの男子だけ」

それと。とファイアルがつなげる。

「フィ、フィアでいいわよ」

「フィ・フィア？」

「確かに腰にナイフが・・・」

「スマミセンでしたファイアルさん！」

「フィア」

「え？」

顔を赤らめて言った。・・・クラッとしてないぞ！ちょっとドキッとしただけだ！

「仲のいい人は私をそう呼ぶの。だから・・・アンタとはチームを組むからOKしただけだかね！変な意味でとらえないでよ！」  
ここでまさかのシンデレ発言かよ。そういうえばリナ先輩もそう呼んでいたな。

「分かつたよ、”フィア”」

「わ、分かれればいいのよ」

そっぽを向くフィア。耳が赤いのは気のせいか？

「で、俺、ルナ、フィアの三人でチームを組むのか？」

「そうしたいのは山々だけど・・・」

苦い顔をして目をルナに持つていく。

「ルナちゃんは人数にカウントされないのよ」

「まあ精霊だからな」

苦い顔をしていたのは、ルナに対して失礼と思つたからだろう。当の本人はもぐもぐと焼きそばパンに・・・

「それは俺のだろうが！」

食べかけの焼きそばパンを取り上げる。するとルナがムツとした顔で上目遣いをする。

「落ちていた」

「置いてあつた、の間違いだろーそしてお前は落ちていたものも食べるのか!?」

「食べ物だつたら」

「じゃあ質問しよう。田の前に食べかけのパンが落ちている。お前はそれを食べるか?」

「誰の?」

「は?」

意味が分からん。

「その落ちていたのは誰の?」

「・・・フィアのだとしよつ」

「私はそんなバカじやないわよ  
隣でフィアが口をとがらせる。」

「じゃあ食べないわ」

「理由は?」

「フィアに悪いもの

「・・・そうか、では学園長の場合まへー」

「食べないわ」

「・・・マーガスさん

「食べないわね」

「・・・クラスメイト」

「失礼だもの」

「俺」

「いただくわ」

「何故だあーーー!」

思わず地面に頭を叩きつける。

「結局は俺のものは食べるだけだらつー」

「違うの?」

「何で当然のような顔していのー?」

ルナは首を傾げた。くそつ、動きが無駄に可愛い。

「どうせ食べかけでしょ。あげなさいよ」

フィアが横やりを入れてくる。

「今度から気をつけろよ」

注意してから渡す。

「バレないようにやるわ」

「行動に気をつける！！」

と言いながらも渡す俺は甘いのか？

でも考えてみる。美少女一人に攻められて対抗できるか？そんなことできるのはラブコメ主人公だけだ。

俺はせいぜい理性を保って普通に対応することだけだ。

「話をまとめるど、あと一人足りないのよ」

いきなり戻ったな。

「でもそんなの俺たち（ルナ）とお前がいれば

男子なんて寄つてくるだろう。

「そう、脅して引き込められるわ」

「かなり物騒！」

何を考えているコイツは！？

「え、違うの？」

キヨトンとした顔になる。「いつも天然かよ。

「あんたと私の力を持つてすれば・・・」

「やめろ！やめとけ！やめてくださいーーお前とルナがいたら、違う

考え方思いつくだらう！」

「違う考え・・・分からぬいわ」

「こいつ自覚なしか？大物だな。

「とにかく、あと一人フリーな奴を見つければいいのか？だったら

リナ先輩とか」

聞くとフィアはすぐに首を横に振る。

「生徒会は優勝チームと戦うことになつてているのよ

そこまで強いのかよ。思わずリナ先輩が戦っているのを想像する。

無理だ。できない。

「そういうわけで、あんたも協力しなさい」

「あのなあ・・・転校生の俺に、誰がいいのか分かる訳ないだろ？」「もともと、あなたの頭には頼るつもりないわよ」

フィアは俺をじっと見る。

「あんたのその観察力を頼りにしているのよ」「自分の眼をなぞる。

「こんなの大した観察力じゃないよ」

「大した、の基準がおかしいのよ、あんたは。」

「またため息をつかれた。それはもう盛大に。」

「何だよ。人をバカみたいに見やがって」

「色んな意味でバカね・・・」

「ねえ、怒つていいかな？怒つていいよね？」

そろそろ我慢の限界だ。俺はゆっくり立ち上がった。

バンッ

俺の頬にヒリヒリと痛みが走る。

フィアは俺を見て驚愕の顔をしている。ルナも口こそ変わらないが、目は普段からは想像できないほど大きく開いている。

ツーッと熱いものが、ヒリヒリしたところから流れる。俺はそれを指で触れる。

ヒリヒリする部分に触ると、ピリッとした痛みを感じた。

触れた指を見ると赤い血が付いていた。

「あんたが転校生か？・・・この程度の殺氣にも気付かないとはな。

精靈に頼りすぎのバカか」

声をした方、後ろを振り向くと、そこには銀髪の男が拳銃をこちらに向けていた。

「誰だお前？」

別に油断をしていたわけではない。殺氣といつほどでもなかつたら放つておいただけだ。

「ザコに名乗るつもりはない」

「そう言つなつて」

適当に言いながら相手の力を見極める。武器は拳銃。大きさはハンドガンくらい。

「ソーマ・アーロン……」

「ソーマ？……あ、こいつか」

「勝手に教えるな、ホーグズ」

「いざれ分かるでしょ」

どうやらこの銀髪の名前は「ソーマ・アーロン」らしい。

「で、そのソーマ君が何の用だ？」

「ホーグズが転校生に負けたといふ噂を耳にした。が、拍子抜けのようだ」

と言つて、ソーマは背を向けた。

「……確かにお前はルールなしの殺し合いだつたら強いかもな」

「……どういうことだ？」

体を向けず、顔だけ向く。

「お前はただの野獸だ」

神士的な笑顔を向ける。

バンッ

音がしたときには俺は体を逸らしていた。

ソーマは次々と弾を撃ち出す。

俺は避けながらも間合いを詰める。いつもと同じ戦法。

「へえ、意外に速いね。」

あと数歩。近づいても撃つな、回り込んで首を打つ。避けるな  
フェイントを入れて追撃する。

しかしどれも違かった。

「おもしろい」

ソーマは拳銃を持ったまま、接近戦に備えて構えをとった。

「おー?」

予想外だったが気にすることではない。あいつは銃による後方支援型。接近戦なら負ける気がしない。

俺の裏拳とソーマの腕がぶつかる。

実際負けなかつた。

でも勝つたわけではない。

「お前・・・接近戦もできたのか?」

俺の拳を一瞬防ぎ、横に流すソーマ。

「こんなのは基本だ。飛び道具を使つやつも、これくらいは留つ  
「基本だけじゃ俺の拳を受けられねーよ」

こいつは相当な実力者らしい。いくら俺が半年しか訓練していないとも、平均よりは上だと思う。それに俺の拳は森にいた大熊も吹っ飛んだぜ?不意打ちだけど。

「俺は天才だからな」

「うるせーぞナルシ」

こう言つてゐる間も俺とソーマの間では、互いの拳と脚がぶつかり合つてゐる。

拳銃使いとは思えない瞬発力だ。

「まあこんなものか」

ソーマがバック転をして距離を空ける。

「逃げんのか?」

「今回は様子見だ。後でお前の担任から連絡が入る。聞いておけ」

そういうと、今度こそ背を向けて帰つて行つた。

とりあえず状況確認。怪我は最初のかすり傷だけのようだ。

「いやー大変だった」

わざとらしく腕で額をぬぐう。

「いや、あんた何で冷静なの？」

「いやいや、俺の心臓はバクバクだぜ？」

「その言葉が一番緊張ないのよ。」

いつも通りの俺だったら平然といられないだろう。しかし俺が冷静でいなといけない。

「・・・」

俺は手でルナを押さえる。

(バカ、殺氣がただ漏れだ)

フィアにバレないように田で注意する。こいつにしては殺氣が漏れすぎだ。もしもこいつが暴走したら、俺は止められる自信がない。

「え?どうしたの?」

フィアは何も気づかなかつたようだ。まあ、あのソーマも気づかないほどだからな。

「・・・ごめん」

そう言つとゆづくじと、少しづつ収めていった。

「何でもないよ。とりあえず教室戻るか」

「そうね。あいつも担任が何とかつて言つていたし」

騒がしい昼食を終え、不満そうにしているルナを引きずりながら教室に向かつた。

?

## イレギュラーといつ実感（後書き）

急いで書き上げたので、次回が思いつかない・・・

しばらく時間をくだれい

誤字・脱字あつたらお願ひします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4952y/>

---

精霊と異世界人

2011年11月23日21時51分発行